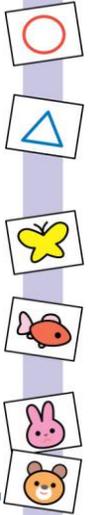
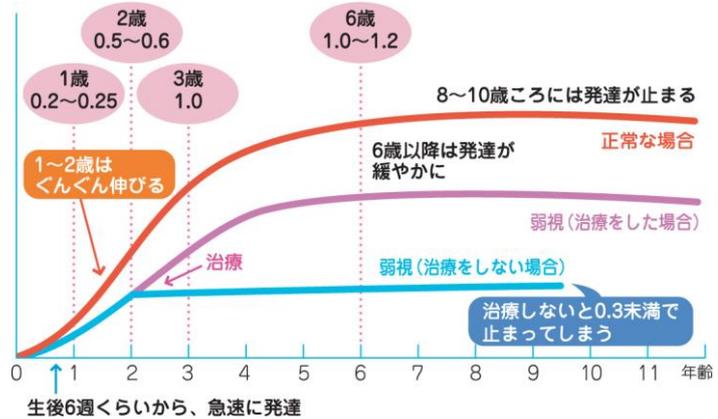




乳幼児期はいちばん視力が伸びる時期です。園では幼児クラスを対象に視力検査をしています。この時期の子どもは自分の目に異常があったとしても、なかなか自覚できません。周りの大人が、つねに子どもの目に気を配り、守っていきましょう。

視力の発達に重要な乳幼児期

生まれたばかりのときは0.01くらいだった視力は、生後6週ころからぐんぐんと発達。5歳で1.0以上になり、その後発達の程度は緩やかになり、8~10歳くらいで完全に止まります。ですから、乳幼児期に、なんらかのトラブルで視力の発達がうまくいかなかった場合、その後視力を伸ばすのはとても難しいのです。日ごろから子どもの目の状態に注意を向け、おかしいと思ったら、早めに受診しましょう。



こんな行動があったら要注意

一度、眼科を受診してみましょう。

- 目を細めたり、しかめたりする
- 横目でものを見ることが多い
- テレビなど、極端に近づいて見る
- 必要以上にまぶしがる

片目の視力チェック法

片目が見えていない状態は、見つけにくいものです。あそび感覚で、さりげなくチェックしてみましょう。子どもの背後から手を回して片方ずつ目を隠し、両方とも同じように見えるか、確認してみましょう。乳児の場合は、どちらか片方を隠したとき、極端にいやがるようなら、左右の視力に大きな差がある可能性が。両方いやがる場合は、目を隠すのが不快なだけということが多いので、問題ないでしょう。



「さかさまつげ」って?

乳幼児期は、ほおの膨らみで、まつげが押し上げられ、それが角膜に当たって痛みや充血が起こることがあります。この状態を「さかさまつげ」と呼び、ひんぱんなまばたきや、目やになどの症状が見られます。自然に治ることが多いので、手術の必要はありませんが、抗生物質や角膜保護剤で治療します。



ものもらいに気をつけましょう

まぶたが赤くはれて、しこりができていたら、ものもらい(麦粒腫)かもしれません。ものもらいは、まつげの根元に細菌が感染して起きるもので、抗生物質の点眼薬などで治療します。痛みがありますが、手でこすったり、触ったりしないように注意してください。

